

氏 名	臼井 康恵
学位の種類	修 士 (看護学)
学位記番号	修 士 第 1 8 8 号
学位授与年月日	平成 2 7 年 3 月 1 0 日
学位論文題目	乳房形態別による児の授乳姿勢と乳頭痛の関連 — 初回授乳時の乳頭血流に着目して —

## 論文内容要旨

※整理番号	192	(ふりがな) 氏名	うすい やすえ 白井 康恵
修士論文題目	乳房形態別による児の授乳姿勢と乳頭痛の関連 —初回授乳時の乳頭血流に着目して—		
<p>I. 研究の目的</p> <p>本研究の目的は、新生児の乳頭への吸着・吸啜行動と乳頭内血流量の現象について明らかにすることと乳房形態によるポジショニング、吸着姿勢による乳頭内の血流状態から、乳頭痛発生との関連性を明らかにすることである。</p> <p>II. 研究方法</p> <p>研究デザインは、測定観察法による関連検証型研究である。本研究の対象者は、妊娠 37 週 0 日から 41 週 6 日の正期産に出産した初産婦と新生児で母親の乳房形態は、乳房Ⅰ型、Ⅱa型、Ⅱb型、Ⅲ型各 3 名で正常乳頭をもつ母児 12 組である。乳頭血流量測定には、アドバンス社製 CSプローベ S サイズを使用し、血流測定には、アドバンス社製レーザードップラーALF21 を、血流解析には Power Lab2/26 及び Lobchart 8 Japanese を使用した。初回授乳指導は、乳房Ⅱ型は横抱き・交差抱き、乳房Ⅰ型は縦抱き、乳房Ⅲ型は脇抱きに統一し、児が吸啜する前に乳頭の血流の安定性を波形から確認後、児の吸着を開始し、約 5 分間吸着時の乳頭内血流波形および児の哺乳状態を左右 5 分ずつ観察した。データ解析には、統計パッケージソフト SPSS Statistics Ver.22 for Windows を用い、すべての検定において有意水準は <math>p &lt; 0.05</math> とした。本研究は、本学の倫理委員会（承認番号 26-21）ならびに研究協力機関の承認を得て実施した。</p> <p>III. 研究結果</p> <p>本研究の対象児の生下児体重は、<math>3082 \pm 246\text{g}</math> (Mean <math>\pm</math> SD) であり、出生時の臍帯血 Ph は <math>7.281 \pm 0.1</math> (Mean <math>\pm</math> SD) で健康状態であった。対象者の授乳姿勢は、横抱き・交差抱き・脇抱き・縦抱きが各 3 名ずつであった。直接授乳の吸着においては、全児が適切な乳頭への吸着が行えていた。初回授乳と乳頭痛の自覚については、初回授乳時に乳頭痛を訴えた者は、8 名 (66.7%) で、乳頭“発赤”を発症した者は 1 名であった。乳頭内血流波形を分析し、「乳頭痛の自覚のある」波形は、血流下降点の基線が 1 回の吸啜波形ごとに徐々に下降し、吸啜ごとの山型の血流上昇の最大ポイントと血流下降最小ポイントが下がることが示された。また、新生児の乳房・乳頭への哺乳行動である吸啜により、乳頭内に血流の減少である虚血状態が生じていることが示された。さらに乳頭痛【あり群】、【なし群】と乳頭血流減少量を比較したところ、乳頭痛【なし群】に比べて統計学的に有意に乳頭内血流量が減少していることが明らかとなった。また、乳房Ⅰ型では乳房Ⅱa型に比べて児の吸啜により有意に乳頭内虚血状態を引き起こしやすく、乳頭痛が強いことが示された。さらに児と母親の体が密着していない姿勢は児の吸啜により乳頭内血流量が有意に減少していることが明らかとなった。</p> <p>IV. 考察</p> <p>本研究により、児の哺乳行動および乳房形態別に授乳姿勢で乳頭内血流減少と乳頭痛との関連が明らかになった。このことで児の吸着により生じる乳頭痛は吸啜行動による乳頭の圧迫による血流の減少であることから、乳頭痛は、児の舌と上顎の間に位置した母親の乳頭が、児の下顎の上昇による圧迫から生じる圧迫性虚血状態であること、乳頭が児の舌の上で安静位に位置できない授乳姿勢が原因となり、乳頭内の血流減少する圧迫性虚血状態であることが示唆された。</p> <p>V. 総括</p> <p>初産婦の初回授乳時の授乳行動から、新生児の乳頭への吸着・吸啜行動と乳頭内血流量の現象および乳房形態別に授乳行動から生じる乳頭痛について乳頭内血流量を指標として評価検討を行った結果、乳房形態によるポジショニング、吸着姿勢によって乳頭内血流虚血と乳頭痛発生との関連性が明らかとなった。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)  
2. ※印の欄には記入しないこと。